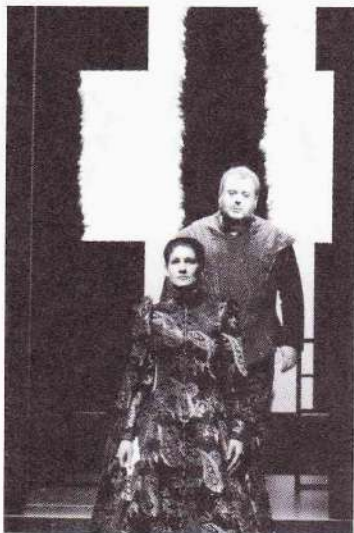


チュエリヒ歌劇場、苦難の末の 《ドン・カルロ》プレミエ

春めいた穏やかな日曜日、3月4日に《ドン・カルロ》のプレミエが決行されたことは、チュエリヒ劇場関係者にとって一種の奇跡だったという。練習期間中、6人の重要な役のうち4人がインフルエンザにかかり、GPも非公開で行われた。そして迎えた初日、エリザベッタ役のアニヤ・ハルテロスがインフルエンザ後期、フィリップ2世役のマッティ・サルミネンはインフルエンザの真っ只中、そして指揮のズービン・メータがギックリ腰という受難のプレミエだった。

今シーズンのハイライトと呼べそうな豪華な客層の中には、メータ夫人の隣に座るソフィア・ローレンの姿もあった。満席の劇場全体が手に汗を握る公演であったが、今宵、満場一致で揺るぎない成功を取めたのはハルテロスだろう。声質は異なるが、マリア・カラスに似た発声法で、すべての音域の声を難なく共鳴させているので、風邪の影響もあまり受けず、絶えず耳に心地よい美声を聴かせてくれた。ファビオ・サルトーリの題名役は、多少かすれた印象を受ける声は風邪のせいとして、重いレパートリーもこなせるほど成熟してきたのに、カーテンコールで1度ならず2度ともブーを叫んだ心なき聴衆は、敵意があると思えず、遺憾だ。初役のマッシモ・カヴァレッティ

とヴェッセリーナ・カサロヴァだが、前者はロドリゴを歌うには未熟だが、その初々しさが演技面では功を奏しており、これからこの役を通してどう成長していくかを期待したい。後者は、なぜこのキャスティングになったのか、不可解だとは言えないが、喝采は浴びていた！メータのオケは、全体的にニュアンスに欠けたが、座ったままの指揮では困難なのだろう。フォルテで彼の鳴らす輝かしい音色は顕在で、苦難の末の成功を得たプレミエと言えよう。 (中 東生)



《ドン・カルロ》より、アニヤ・ハルテロス(手前)と題名役のファビオ・サルトーリ
©Suzanne Schwierzt

